

日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価

— 評価尺度開発の試み —

渡部 倫子

(2003年9月30日受理)

Native speakers' Evaluation of Learners' Speech
— A trial of developing a native speakers' evaluation scale —

Tomoko Watanabe

This purpose of present study was to develop an evaluation scale in order to study how native speakers evaluate the speech and behavior of Japanese learners.

To confirm the reliability and the validity of this scale, I carried out a questionnaire survey by viewing how 83 native speakers responded these items after they saw a videotape recording of a learner's free conversation with a native speaker. The questionnaires contain of 55 items (34 items for learners' competence evaluated by native speakers and 21 items for overall evaluation) were selected from the former related studies and the result of follow-up interview to 50 native speakers.

In this analysis, 5 factors for learners' competence evaluated by native speakers and 3 factors for overall evaluation were extracted from the factor analysis first. The reliability of the scale was confirmed by the Good-Poor analysis and Cronbach's coefficient alpha. Furthermore, I propose the hypothesis of causal relation model of native speakers' evaluation based on Pearson's product-moment correlation coefficient and the multiple regression analysis.

As a result, the reliability and the validity of the scale are proved. And from my hypothesis of the causal relation model of native speakers' evaluation, it was found that

- 1) 'Expressiveness', 'interlocution competence', 'Listener-friendliness and comprehensibility' and 'vocabulary and expression' influence the evaluation of 'Japanese oral proficiency'.
- 2) 'Communication strategies' influences the evaluation of 'approachability'.
- 3) 'Communication strategies' and 'expressiveness' influence the evaluation of 'positive attitude'.

Key words: evaluation, native speaker, learners' speech

キーワード：評価，母語話者，学習者の発話

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：縫部義憲（主任指導教官），水町伊佐男，
三浦省五，迫田久美子，松見法男

1. 問題の所在と研究の目的

60年代後半から70年代初めにかけて、第二言語教育では、コミュニケーション能力の育成が重視され始め、母語話者の評価¹⁾に関する研究が注目されるようになった。母語話者による評価に注目が集まったのは、学習者の誤用が、それを受け取る人に及ぼす効果(評価者が学習者の意図をどう受け取ったか、評価者の誤りへの情意的な反応)を解明する必要があるからである。母語話者相手に学習者の発話がどこまで通じるかに焦点が置かれるようになり、形式の訂正よりも母語話者(評価者)にとって、それが理解しやすいか否かが注目され始めたのである(Hadden, 1991)。日本語教育では、日本語母語話者²⁾による評価に関する研究は、1980年代後半から注目され始め、現在は誤用・正用を含む学習者の発話³⁾に対する評価について様々な研究が行われている(渡部, 2002)。母語話者による評価の実態が明らかになれば、教室内に教室外(非教師母語話者)の視点を取り入れることによって、シラバスの再構築、評価法⁴⁾の改善、フィードバックや誤用訂正の方法等、様々な提案をすることが可能だとされている(小林, 2000)。

これまでの先行研究では、母語話者による評価の全体的な特徴、評価の対象項目(文法、語彙、発音、理解、流暢さ、待遇表現、表記、語用論的能力、非言語的要素、情報の伝達等)、評価を変化させる要因等が報告されている。しかし、母語話者の評価の実態を解明するためには、いくつかの課題が残されている。

第一の課題は、調査方法である。先行研究では、質問紙(石崎, 1999; 宮岡他, 1999; Okamura, 1995等)とインタビュー(小池, 1998; 原田, 1998; Enomoto and Marriott, 1994等)という2種類の方法で母語話者に評価させている。質問紙を用いた場合は、多くの調査対象者に対する調査が可能であり、結果をより一般化できるという利点がある。しかし、研究者が設定した評価項目(文法、発音、語彙等)が、真に母語話者の評価対象を反映しているかという根本的な問題がある。研究者のバイアスを回避して実態を調査するためには、探索的調査を行って妥当性と信頼性の高い評価尺度を作成する必要がある。先行研究では、母語話者に学習者の発話に対する印象を自由に語ってもらうという方法のインタビューを用いた探索的調査が行われている(石崎, 1999; 小池, 1999; 原田, 1998)。しかし、インタビューを採用した先行研究は少なく、評価する母語話者の人数も十分とはいえないため、母語話者の評価の実態を解明するまでには至っていない。

第二の課題は、評価の対象項目間の関連と、その項目に対する評価が全体的な評価に与える影響が、未だ明らかになっていない点である。石崎(1999)は、質問紙による非教師母語話者の評価と、談話分析から数量化した学習者の発話の特徴との相関を明らかにしているが、非教師母語話者の評価がどの程度発話の内容に則しているかということは分かっても、どのような要素が評価に影響を与えるかということについては、間接的に予測するしかない。また、この課題は、口頭運用能力の評価基準に関する研究(庄司, 1995)でも指摘されており、母語話者がどのように評価するかという実態を明らかにすれば、評価基準の改善にも何らかの提案が出来ると考える。

そこで本研究では、これら二つの課題について検討することを目的とする。

2. 調査 1

この目的に沿って本研究では、まず調査1(フォローアップ・インタビュー)を行った。調査対象者は、母語話者50名(日本語教師、非教師母語話者)である。評価の材料は、25名の母語話者と学習者25名のペアが自由会話をしている場面を撮影したビデオ(10分)を用いた。調査の手続きは以下①~④の通りである。調査対象者に、①自由会話のビデオを視聴してもらい、自由に印象を語ってもらう(『全体的評価』)。②①の直後、再度同じビデオを視聴してもらい、視聴と同時に進行で○と×の評価板を用い評価してもらう。視聴しながら上手いと思った箇所でも○の評価板をあげてもらい、下手だと思った箇所でも×の評価板をあげてもらい、その様子をビデオ録画し、評価ビデオとする。③②の直後、評価者に評価ビデオを見てもらう。評価板を挙げた映像の後にビデオを止め、○(上手) / ×(下手)の評価板を挙げた理由を話してもらう。④①と③のコメントを文字化した後、KJ法を参考に内容的な分類を行い、『全体的評価』項目と『評価の対象』項目を選定した。

以上の予備調査の結果をもとに選定した項目は、石崎(1999)、小池(1998)、Hadden(1991)等で用いられた質問項目を含むものであった。評価尺度は、『評価の対象』34項目、『全体的評価』21項目であった(因子分析に基づいて選定された項目は、表1、表2にある)。なお、『評価の対象』34項目については、内容的な分類を行い、Canale(1983)が定義したコミュニケーション能力の要素とACTFL-OPI3の評価基準を基に、I「文法能力(文法、発音、語彙・表現)」、II「談話能力」、III「方略的能力」、IV「社会文化的能

力」の4つのカテゴリーを仮定した。

3. 調査 2

3.1. 目的

調査2の目的は、①調査1で作成した評価尺度の構成と因子の妥当性を検討すること、②評価尺度の信頼性を検討すること、③評価の対象項目に対する評価と全体的評価の関連を探索的に明らかにすることである。

3.2. 方法

3.2.1. 調査期日

調査実施期日は、2003年5月6日～14日であった。

3.2.2. 調査対象者

日本語母語話者83名であった。ただし、回答に欠損値がある、もしくは、視聴してもらったビデオで会話している学習者と面識がある7名のデータを除いた。したがって、77名のデータが分析対象であった。77名の年齢は19～38歳で、男性が14名、女性が63名であった。また77名のうち、大学生は51名で、社会人は26名であった。大学生51名のうち、22名は日本語教師の経験がなく日本語教育を専攻していない大学生で、29名は日本語教師の経験がなく日本語教育を専攻している大学生であった。また社会人26名のうち、4名が会社員で、4名が主婦であり、日本語教師は18名であった。

3.2.3. 材料

評価の対象となる学習者の発話については、フォローアップ・インタビューで用いたビデオを基に作成した。ビデオは初対面の母語話者25名と学習者25名の計25ペアによる自由会話を撮影したものである。フォローアップ・インタビューを行った母語話者50名に日本語の上手さを5段階評定してもらい、その得点によって、25名の学習者をレベル上位群8名、中位群9名、下位群8名に分類した。調査2では、材料の違いによって生じる要因を排除するため、中位群9名の会話の中から、1つの会話のみを材料として用いることにした。会話の選定にあたっては、質問項目の評価が可能だと予想される部分であることと、話題が「好きな食べ物」に統一可能であることを基準にした。

この材料の適切性については、予備調査を行って検討した。調査2の対象者とは別の母語話者13名（日本語教師7名）に材料を視聴してもらい、評価尺度の項目が評価可能な材料であるかどうかを、評価可能であれば質問項目にチェックするという方法で判定してもらった。また、評価しやすさ、しにくさ等について感

想や意見を求めた。以上の予備調査を経て、レベル中位群の学習者（研究生、日本語学習年数5年、日本滞在期間3ヶ月、中国語母語話者）と日本語母語話者による「好きな食べ物」に関する自由会話ビデオ（2分間）を最終的に選定した。

3.2.4. 手続き

質問紙による集団形式で回答を求めた。まず、調査対象者に練習用のビデオを視聴してもらい、評価尺度の一部を抜粋した質問項目に回答してもらった。次に、上記材料のビデオを視聴してもらい、学習者に対する印象に、『評価の対象』34項目、『全体的評価』21項目がどれほどあてはまるかについて、「1あてはまらない」から「5あてはまる」までの5段階で評定を求めた。なお、ビデオの視聴中は、質問項目を読むことが出来ないようにした。得られたデータは、SPSS for Windows 10を用いて、因子分析、G-P分析、重回帰分析、クロンバックの α 係数とピアソンの積率相関係数の算出という統計処理を行い分析した。

4. 結果と考察

4.1. 評価尺度の構成と因子の妥当性の検討

まずフォローアップ・インタビューの結果と先行研究から選定した評価尺度の構成を調べるために、『評価の対象』34項目と、『全体的評価』21項目それぞれ因子分析を行った。因子の抽出には、最尤法・プロマックス回転⁵⁾を用いた。なお、『評価の対象』については、予め設定していたカテゴリー（下位尺度）と同様の因子構造になるかどうかを確認した。ガットマン基準に基づき固有値1.0で因子数を決定した結果、『全体的評価』では3因子、『評価の対象』では10因子が抽出された。『評価の対象』については、因子負荷量がどの因子に対しても絶対値で.40未満の項目と、他の因子と当該因子との負荷の差が1.0未満の項目が見られたため、それらを削除し、残った項目について因子分析から項目削除までの一連の作業をもう一度繰り返した。以上の手続きにより選ばれた項目について、再度同様の手法で因子分析を行った。その結果、15項目が除外され、最終的に『評価の対象』では5因子が抽出された（表1、表2を参照のこと）。この因子分析結果について、それぞれの因子に高負荷を示す項目の内容に基づき、因子名を決定した。なお、『評価の対象』については、もとの下位尺度も参考にした。

『全体的評価』の質問項目から得られた3因子は、以下のように命名した。第1因子は、学習者が用いた日本語に対する印象に関わる項目を含んでいたため、

表1. 『評価の対象』についての因子分析結果 (プロマックス回転後)

| 項目 | | I | II | III | IV | V |
|-----------------|---|------|------|------|------|------|
| I ストラテジー | | | | | | |
| 方略的能力 | この留学生は、不自然な沈黙が少ない。 | .95 | -.21 | .04 | .05 | .03 |
| 方略的能力 | この留学生は、相手の話す日本語が分からない時に、そのままにしない。 (相手に意味の確認をする。「えっ?」「〇〇ですか?」と聞き返すなど) | .76 | -.03 | -.14 | -.03 | .14 |
| 社会文化的能力 | この留学生は、くだけた表現を適切に使っている。 | .72 | .00 | .33 | -.06 | -.14 |
| 談話能力 | この留学生は、相手の質問を理解している。 | .55 | .39 | -.09 | .06 | -.08 |
| 方略的能力 | この留学生は、なかなか日本語が出てこない時に、うまく対処している。 (ジェスチャー・自分が知っている他の言葉・「なんだっけ」を使うなど) | .40 | .08 | .15 | .09 | .23 |
| II 表現力 | | | | | | |
| 文法能力 (語彙・表現) | この留学生は、たくさんの言葉や表現を知っている。 | .08 | .79 | -.24 | .01 | -.07 |
| 談話能力 | この留学生は、自分から会話を盛り上げている。 (話題を提供する、質問する、表情など) | .02 | .78 | .14 | -.08 | -.07 |
| 談話能力 | この留学生は、自分の気持ちを上手く表現している。 | .24 | -.70 | .01 | -.04 | .02 |
| 文法能力(発音) | この留学生の文の抑揚(アクセント・イントネーション)は、自然である。 | -.09 | .64 | .23 | -.04 | .08 |
| 方略的能力 | この留学生の表情やジェスチャーは、コミュニケーションに役立っている。 | .23 | .53 | -.09 | -.02 | .04 |
| III 対話能力 | | | | | | |
| 談話能力 | この留学生は、間のとり方が上手い。 | .08 | -.06 | .82 | .05 | -.14 |
| 談話能力 | この留学生は、タイミングよく相手に話しかけている。 | -.04 | -.02 | .78 | -.10 | -.01 |
| 談話能力 | この留学生の応答は、的確である。 | -.05 | -.08 | .65 | .06 | -.20 |
| IV 聞きやすさ | | | | | | |
| 方略的能力 | この留学生は、自分の話を相手に理解してもらおうとしている。 | -.02 | -.01 | -.10 | 1.04 | -.05 |
| 文法能力(発音) | この留学生の声の大きさや出し方は、感じがいい。 | .06 | -.11 | -.02 | .62 | -.06 |
| 談話能力 | この留学生の話の流れは、スムーズである。 | .02 | -.15 | .12 | .45 | -.08 |
| 文法能力(文法) | この留学生は、文法の間違いが少ない。(助詞、動詞の間違いなど) | -.09 | -.20 | .20 | .40 | .10 |
| V 語彙・表現 | | | | | | |
| 文法能力 (語彙・表現) | この留学生は、言葉や表現の間違いが少ない。 | -.04 | -.05 | -.08 | -.02 | 1.03 |
| 文法能力 (語彙・表現) | この留学生の話には、あなたが感心するような言葉や表現があった。 (若者言葉、専門用語、話し言葉など) | .18 | .07 | .01 | -.08 | .57 |

固定値 5.92 2.09 1.87 1.53 1.28
 寄与率 16.55 7.84 17.58 8.75 6.25

表2. 『全体的評価』についての因子分析結果 (プロマックス回転後)

| 項目 | | I | II | III | |
|------------------|--------------|------------|--------------|--------------|-------------|
| I 運用能力 | | | | | |
| 下手 | 上手 | .93 | -.19 | -.01 | |
| 流暢でない | 流暢 | .89 | -.01 | .03 | |
| 未熟 | 成熟 | .88 | .15 | -.30 | |
| 不自然 | 自然 | .79 | .02 | .08 | |
| 正確でない | 正確 | .78 | -.10 | .03 | |
| 不慣れな | 慣れた | .62 | -.02 | -.04 | |
| わかりにくい | わかりやすい | .61 | .25 | -.11 | |
| 外国人らしい | 日本人らしい | .59 | -.13 | .13 | |
| 違和感がある | 違和感がない | .56 | -.02 | .32 | |
| 知的でない | 知的 | .54 | .10 | .25 | |
| 意思疎通が出来ない | 意思疎通が出来る | .45 | .09 | .08 | |
| II 親しみやすさ | | | | | |
| 痛にさわる | 感じがいい | -.09 | .94 | .02 | |
| この留学生と話してみたくない | この留学生と話してみたい | -.70 | .84 | .05 | |
| 疲れる | 楽 | -.16 | .69 | .11 | |
| なれなれしい | 親しみがある | .02 | .68 | -.12 | |
| 非協力的 | 協力的 | .06 | .65 | .27 | |
| 失礼な | 丁寧な | .25 | .63 | -.27 | |
| III 積極性 | | | | | |
| 内気 | 内気でない | -.14 | -.12 | .96 | |
| 消極的 | 積極的 | -.00 | .18 | .77 | |
| 緊張している | リラックスしている | .29 | .02 | .58 | |
| 自信がない | 自信がある | .31 | -.03 | .55 | |
| | | 固定値 | 8.49 | 3.17 | 1.87 |
| | | 寄与率 | 38.47 | 13.23 | 7.24 |

「運用能力」因子とした。第2因子は、学習者が母語話者に与える印象に関わる項目で構成されており、話してみたいと感じさせる感じのよさ、楽で親しみやすい印象等の項目が高い因子負荷量を示したので、「親しみやすさ」因子とした。第3因子は、学習者がどのように会話に取り組んでいるかという態度に関わる項目を含んでいたため、「積極性」因子とした。第1因子は、学習者の能力に関わる項目を、第2因子と第3因子は、学習者のパーソナリティに関わる項目を含んでいた。

このことから、母語話者が学習者の発話を評価する際は、「運用能力」という観点だけでなく、「親しみやすさ」や「積極性」という学習者のパーソナリティに関わる因子も潜在的観点として働くことが示唆される。

『評価の対象』の質問項目から得られた5因子は、以下のように命名した。『評価の対象』の第3因子と第5因子は、予め設定していた下位尺度構成に従うものであった。そのため、まず第5因子については、下位尺度名 (I 「文法能力 (語彙・表現)」) をそのまま因子名とし、第5因子を「語彙・表現」と命名した。「語彙・表現」因子は学習者の語彙・表現の質や適切さに関わる内容であった。第3因子は、下位尺度名 (II 「談話能力」) と一致していたが、ポーズ、ターン・テイキング、応答という相手との会話のやりとりに関係する項目であるため、「対話能力」因子と命名した。一方、その他の因子は、複数の下位尺度が同一の因子に含まれるという結果になった。第1因子には、方略的能力が3項目含まれており、くだけた表現を使

用したり、相手の質問を理解していることを示したりすることもコミュニケーション・ストラテジーと捉えられるので、「ストラテジー」因子とした。第2因子の質問項目は、自分の気持ちを豊富な表現、自然な抑揚、ジェスチャー等で上手く表現し、会話を盛り上げる能力を表しているため、「表現力」因子とした。第4因子の質問項目は、文法の間違いで話の流れを妨げず、感じの良い声の大きさや出し方で、相手に聴きやすく、理解しやすくしようとする能力を表しているため、「聴きやすさ」因子とした。

以上の5つの因子は、母語話者が学習者の発話を評価する際に、潜在的な観点として働くといえる。つまり、母語話者には、先行研究でカテゴリー分けされているような、I「文法能力(文法, 発音, 語彙・表現)」, II「談話能力」, III「方略的能力」, IV「社会文化的な能力」という観点で評価する部分と、評価しない部分とがあることが伺える。「表現力」と「聴きやすさ」にI「文法能力(文法, 発音)」が含まれていることから、学習者の発話に対する評価に際しては、特にI「文法能力(文法, 発音)」が独立した潜在的観点として働く可能性は低いと考えられる。

4.2. 評価尺度の信頼性の検討

次に、評価尺度における各項目が弁別性のある項目かどうかを確認するために、『評価の対象』19項目、『全体的評価』21項目のそれぞれにおいてG-P分析⁶⁾を行った。質問項目の合計得点の高低によって調査対象者を高得点群と低得点群の2群に折半し、それぞれの平均値の差をt検定で比較した。その結果、『評価の対象』と『全体的評価』における全ての項目で、高得点群と低得点群の間に有意な得点差がみられた(『評価の対象』: $t_{(75)}=11.27, p<.05$, 『全体的評価』: $t_{(75)}=10.98, p<.05$)。したがって、『評価の対象』項目、『全体的評価』項目は、それぞれ全て弁別性の高い項目として採用した。

また、評価尺度全体の信頼性については、クロンバックの α 係数を算出し、尺度の内的整合性によっても検

討した。 α 係数は、『評価の対象』で.91、『全体的評価』で.92であり、いずれも.90以上の α 係数であった。これらは、評価尺度の信頼性が高いことを示している。

以上の結果から、この評価尺度は弁別力と内的整合性において高い信頼性があることが確認された。これまでの母語話者評価研究で用いられてきた尺度と比較した場合、本研究での評価尺度は、既存の尺度と、フォローアップ・インタビュー(調査1)によって収集されたものからなっていた。そのため、評価の実態により近く、幅広い項目によって構成され、構成概念的妥当性も高いといえる。

4.3. 『評価の対象』と『全体的評価』の関連

さらに、『評価の対象』と『全体的評価』にどのような関係があるかを明らかにするために、それぞれの因子得点を用いて、ピアソンの積率相関係数を算出した(表3を参照のこと)。その結果、『評価の対象』の全ての因子と「運用能力」の間には有意な相関が見られたが、「対話能力」, 「語彙・表現」と「親しみやすさ」の間、及び「聴きやすさ」と「積極性」の間には有意な相関がみられなかった。つまり、『評価の対象』に対する評価が『全体的評価』に関わっている部分と、関わっていない部分があるといえる。

そこで、『全体的評価』は、『評価の対象』に対して評価することにより、どの程度正確に予測できるか、また、『評価の対象』を用いた予測において重要な因子は何かを明らかにするために、因子得点を用いて重回帰分析を行った(表4を参照のこと)。ここでは、『評価の対象』項目が説明変数であり、『全体的評価』項目が基準変数となる。なお、本研究では、「偏回帰係数や標準偏回帰係数の値によって、異なる独立変数の相対的な重要度を判断するというのは、かなり困難な問題である(芝・南風原, 1990:159)」という指摘から、『評価の対象』項目の相対的な重要度については言及しない。

分析の結果、「運用能力」の予測においては、「表現力」, 「対話能力」, 「聴きやすさ」, 「語彙・表現」が有

表3. 『評価の対象』と『全体的評価』との相関

| | | 評価の対象 | | | | |
|-------|--------|--------|------|------|-------|-------|
| | | ストラテジー | 表現力 | 対話能力 | 聴きやすさ | 語彙・表現 |
| 全体的評価 | 運用能力 | .42* | .76* | .58* | .63* | .50* |
| | 親しみやすさ | .79* | .40* | .20 | .37* | .29 |
| | 積極性 | .49* | .52* | .31* | .26 | .33* |

* $P<.05$

表4. 『評価の対象』に対する評価が『全体的評価』に及ぼす影響 (重回帰分析の結果)

| | 全体的評価 | | | | | |
|----------------------|-------|--------------------------------|--------|--------------------------------|-------|--------------------------------|
| | 運用能力 | | 親しみやすさ | | 積極性 | |
| | 偏回帰係数 | 標準偏回帰係数 β coefficient | 偏回帰係数 | 標準偏回帰係数 β coefficient | 偏回帰係数 | 標準偏回帰係数 β coefficient |
| ストラテジー | -.00 | -.00 | .68 | .67* | .30 | .30* |
| 表現力 | .46 | .44* | .01 | .01 | .35 | .34* |
| 対話能力 | .17 | .16* | -.16 | -.15 | -.04 | -.04 |
| 聴きやすさ | .33 | .34* | .17 | .18 | -.01 | -.01 |
| 語彙・表現 | .19 | .19* | .13 | .14 | .13 | .13 |
| 回帰定数 | -.00 | | -.00 | | .00 | |
| 重相関係数 R | .85* | | .75* | | .60* | |
| 重決定係数 R ² | .73 | | .56 | | .37 | |

* $p < .05$

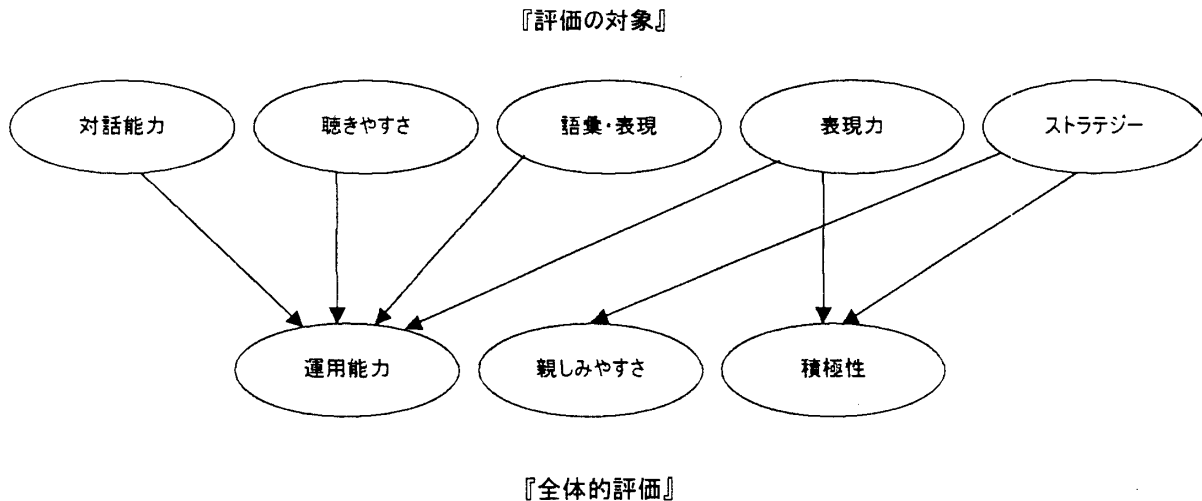


図1. 母語話者評価の因果モデル

意に寄与しており、「表現力」、「対話能力」、「聴きやすさ」、「語彙・表現」の評価が高いほど、「運用能力」の評価が高いことが予測できることが分かった。なお、「表現力」、「対話能力」、「聴きやすさ」、「語彙・表現」が「運用能力」を予測・説明しうる割合は、73%である。

また、「親しみやすさ」の予測においては、「ストラテジー」が有意に寄与しており、「ストラテジー」の評価が高いほど、「親しみやすさ」が高いことが予測できることが分かった。なお、「ストラテジー」が「親しみやすさ」を予測・説明しうる割合は、56%である。

さらに、「積極性」の予測においては、「表現力」、「ストラテジー」が有意に寄与しており、「表現力」、「ストラテジー」の評価が高いほど、「積極性」が高

いことが予測できることが分かった。なお、「ストラテジー」と「表現力」が「積極性」を予測・説明しうる割合は、37%⁷⁾である。つまり、「運用能力」を評価する際、「聴きやすさ」、「表現力」、「対話能力」、「語彙・表現」に対する評価が影響しており、この3つの共通因子が重要な『評価の対象』項目であるといえる。また、「親しみやすさ」を評価する際は「ストラテジー」に対する評価が、さらに、「積極性」を評価する際は「ストラテジー」、「表現力」に対する評価が影響しており、重要な項目であることが分かった。以上のような『評価の対象』と『全体的評価』の因果関係を図1に提示する。

図1から、自分の気持ちを豊富な表現、自然な抑揚、ジェスチャー等で上手く表現し、会話を盛り上げると

いう「表現力」を持ち、相手との会話のやりとり（「対話能力」）が適切に出来、相手に「聴きやすい（さ）」という印象を与え、適切な、しかも相手を感じさせるような「語彙・表現」を用いる学習者は、「運用能力」が高いと評価されることが予測される。また、相手の質問を理解し、コミュニケーションにおける問題を解決するための発話をし、時にはくだけた表現をつかうという「ストラテジー」を用いると、学習者のパーソナリティに関わる「親しみやすさ」や「積極性」の評価が高くなることも予測される。加えて、「表現力」は、学習者の日本語「運用能力」だけでなく、学習者のパーソナリティ（「積極性」）に対する評価にも影響を与えていることが分かった。

最も興味深いのは、「ストラテジー」に対する評価である。Canale (1983) は、方略的能力をコミュニケーション能力の構成要素の一つとして、文法能力、談話能力、社会文化的能力の三つを同位に扱っているが、母語話者評価においては、「ストラテジー」は、学習者の「運用能力」の評価を予測するものではなく、学習者の「親しみやすさ」と「積極性」を予測するという結果になった。この結果から、母語話者が「ストラテジー」を「運用能力」とは異なる概念として評価していることを学習者に伝えた上で、「ストラテジー」を指導するという方法が提案できる。なかなか日本語が出てこない時にうまく対処して不自然な沈黙を避け、相手の質問を理解し、もし分からない場合も何らかの対処を行うことや、時にはくだけた表現を使うことで、初対面の会話において母語話者に「この学習者は積極的だ／親しみが持てる」という好印象を与えられるという母語話者評価の実態は、有益な情報となるだろう。しかし、Schmidt (1983) は、リスクを回避するコミュニケーション・ストラテジーを発達させている学習者は、それを言語的能力の発達と引き換えにしている危険性を示唆している。母語話者評価の実態を踏まえた上で、どのように「ストラテジー」を指導し、評価すべきか再検討する必要があるだろう。

また、「運用能力」の予測において最も相関係数の大きい「表現力」を意識して指導し、フィードバックするという方法も考えられる。「表現力」の中には、従来指導の中心となっている発音と語彙・表現に加え、自分の気持ちを上手く表現しているか、自分から会話を盛り上げようとしているか、コミュニケーションに役立つ表情やジェスチャーの使用をしているかという新しい観点が含まれていることに注目したい。語彙や表現が豊富どうか、発音が自然かどうかというよりも、それらを内包した表現力があるかどうかで判断する基準を教育に活用できるのではないだろうか。①学習者

が持つ「ストラテジー」、「表現力」、「語彙・表現」、②母語話者が判断する「聴きやすさ」、③母語話者と学習者のやりとりにおける「対話能力」という新しいカテゴリーで、コミュニケーション能力（「運用能力」）を再考しなければならない。

5. まとめと今後の課題

本研究では、評価尺度の項目間の相関だけでなく、先行研究では明らかにされていなかった各項目の潜在的な因子、因子間の因果関係、各因子の重要性等、母語話者による評価の実態の一端を明らかにすることが出来た。また、『全体的評価』を予測する因果関係モデル（図1）の作成を可能にする尺度を作成したことの意義は大きいといえよう。さらに、本研究で明らかになった母語話者による評価の実態は、日本語教師や学習者にとって、一つの有益な情報となるだろう。

今後は、共分散構造分析によって①本研究で得られた母語話者モデルを検証し、②レベルの異なる学習者に対する評価においても同様の因子構造が見られるかどうか、③調査対象者として母語話者教師と非教師母語話者の比較したとき、評価尺度の有用性や潜在的な共通因子にどのような違いが見られるかを検討することを今後の課題とする。

【注】

- 1) 母語話者による評価とは、測定（＝狭義の評価）に限定されたものではなく、「話をしてとても楽しかった」、「何を言いたいのかわからなかった」という反応、印象、感想（＝広義の評価）のレベルまでをも含んだものと定義されている（小林，2000）。
- 2) 日本語が母語である人を指し、日本語教師と非日本語教師を含む。以後、母語話者と表記する。
- 3) 本研究では、発話を、口頭で言語を利用すること及び、ジェスチャーや表情という非言語的行動によって、考えや感じたことを明確にし、考えたこと、感じたこと、意志、要求等を相手に伝えることと定義する。また、誤用と正用を含むものとする。
- 4) 口頭運用能力を測定する ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) - OPI (Oral Proficiency Interview) のテストは、テストであると同時に非教師母語話者としてインタビューを行うことが要求される。そのため、非教師母語話者のメンタリティーを解明する必要性が指摘されている（山内編，2002，p.6，15）。

- 5) データが多変量正規分布からの無作為標本であり、因子間に相関が予想されたため選択した(松尾・中村, 2002)
- 6) Good-poor analysis (上位群下位群分析)。評価尺度の質問項目全体が、学習者の発話について、優れているものと劣っているものとに弁別する力を持つかどうかを調べるための検定方法。本来は削除項目を特定するために用いられる。
- 7) 様々な誤差がデータに混入するため、説明率が50%未満でも、その値はかなり高い値として解釈される。

【引用文献】

- 石崎晶子 (1999) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第2言語としての日本語の習得研究』第3号, pp.19-35.
- 小河原義朗 (1993) 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』第3号, pp.1-12.
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』第2号, pp.138-155.
- (1999) 「自由に語らせる調査面接法の有効性—学習者の会話能力に対する母語話者の評価の調査において—」『北海道大学留学生センター紀要』第3号, pp.114-134.
- 小林ミナ (2000) 「「何を」教えるかの再吟味へ—日本人評価研究の意義と限界—」『北海道大学留学生センター紀要』第4号, pp.149-159.
- 芝裕順・南風原朝和 (1990) 『行動科学における統計解析法』東京大学出版会.
- 庄司恵雄編 (1995) 『日本語研修コース標準口頭表現力測定検査法開発のための企画調査研究成果報告書』岡山大学留学生センター.
- 原田明子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』第2号, pp.157-167.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002) 『誰も教えてくれなかった因子分析—数式が絶対に出てこない因子分析入門—』北大路書房.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・浮田三郎 (1999) 「外国人が用いた待遇表現に対する中国地方の日本人の評価」『日本語教育』103号, pp.40-48.
- 山内博之編 (2002) 『OPI10周年記念合同フォーラム論文集』, 日本語 OPI 研究会.
- 渡部倫子 (2002) 「日本人評価研究の発展と課題」『教育学研究紀要 第二部』, 第48巻, 中四国教育学会, pp.341-346.
- Canale, M. (1983) "From communicative competence to communicative language pedagogy", In Richards, J. C., and Schmidt, R., eds., *Language and Communication*, Longman, pp.2-27.
- Enomoto, S., and Marriott, H. (1994) "Investigating evaluative behavior in Japanese tour guiding interaction", *Multilingua* 13, pp.131-161.
- Hadden, B. L. (1991) "Teacher and Nonteacher Perceptions of Second-Language Communication", *Language Learning*, 41, pp.1-24.
- Okamura, A. (1995) "Teachers' and Nonteachers' Perception of Elementary Learners' Spoken Japanese", *The Modern Language Journal*, 79, pp.29-40.
- Schmidt, R. (1983) "Interaction, acculturation and the acquisition of communicative competence", In Wolfson, N., and Judd, E., eds., *Sociolinguistics and Second Language Acquisition*, Rowley, Newbury House, pp.137-174.

付記 調査にご協力下さった皆様に深く感謝いたします。

(主任指導教官 縫部義憲)